



# 館長だより

山形県産業科学館

令和8年1月8日(木)

発行 館長 加藤智一

## 午年に因んで — 馬たちの進化物語



Merychippus

風が吹くたび、大地はざわめき、草原は波のようになっています。ですが、はるか5500万年の昔、この地は深い森に覆われ、湿った土の匂いが満ちていました。そこに、小さな影がひっそりと暮らしています。名をシフルヒップスといいます。体長はおよそ20~30cm、体重は4~6kgほどで、足の指は前足に4本の指、後ろ足に3本の指があり、森の柔らかい地面を歩くのにぴったりの構造。「子犬サイズ」の馬のご先祖さまです。

森の中では、葉っぱや柔らかい植物を食べて生活していました。そして敵から身を守るには、素早く木々の間をすり抜けることが何より大切でした。彼らの世界は、まだ「馬」という言葉から遠く離れた存在でした。

やがて、地球はゆっくりと姿を変えていきます。気候は冷え、乾燥が進み、森は後退し、広大な草原が地平線の向こうまで広がり始めました。木々の影に隠れて生きてきたシフルヒップスの子孫たちは、やがて新しい世界に向き合わざるを得なくなります。2300万年から530万年前のことです。

草原は、森とはまったく違い、隠れる場所は少な

く、捕食者の目は鋭く、逃げ場はどこにもありません。しかし同時に、そこには無限の空間がありました。走る者だけが生き残れる世界です。こうして、馬たちの進化は大きく舵を切ることになったのです。

まず変わったのは足でした。柔らかい森の地面に適応していた複数の指は、草原の硬い土を蹴るには不向きです。そこで、指は徐々に退化し、一本の太い指（後に「蹄」と呼ばれる構造）が発達していきます。一本の指で大地を叩くと、力はまっすぐ前へと伝わります。速く、遠くへ!! その変化は、まるで大地そのものが馬を走らせようとしているかのようでした。

そして、視界もまた変わりました。森では近くの危険を察知することが重要でしたが、草原では遠くの影をいち早く見つけることが生死を分けることになります。馬たちの目は横に広がり、視野はほぼ全周を見渡せるほどに広がりました。風の匂いを嗅ぎ、地面の震えを感じ、遠くの影を捉える、草原の旅人としての感覚が磨かれていきました。この時、草原の覇者として名を馳せたのがメリキップスです。彼らはすでに、私たちが知る「馬」の姿に近づいていました。しなやかな脚、一本の蹄、広い視野、そして長距離を走り抜ける持久力。草原を渡る風とともに、彼らは群れをなし、季節とともに移動しました。

メリキップスの群れは、朝日が昇るとともに動き出します。草原の端から端まで、彼らの足跡が線を描きます。捕食者が近づけば、群れは一斉に走り出し、地面を震わせながら遠くへ逃れます。その姿は、まるで大地そのものが動き出したかのようでした。やがて、メリキップスの子孫たちはさらに進化し、プラエワルスキウスやエクウスといった現代の馬の祖先へつながっていきます。草原は彼らを鍛え、風は彼らを磨き、時間は彼らを「走るための生き物」へと仕上げていったのです。

そして現代。私たちが目にする馬たちは、数千万年にわたる進化の結晶です。一本の蹄で大地を蹴り、広い視野で世界を見渡し、群れとともに生きる。その姿の奥には、森を駆けた小さなシフルヒップスの影が、確かに息づいています。午年の今年、馬の姿を見かけたら、ほんの少しだけ思いを馳せてみてください。彼らの背後には、地球の変動とともに歩んだ長い旅路があります。森の影から草原の風へ。その進化の物語は、今もなお、私たちの想像を超えるスケールで続いているのです。